曽国藩と横井小楠の「誠」について

陳　衛平

本論に入る前に、中日の近代儒学倫理思想の比較研究に関して、私の問題意識を三点ほど指摘したい。

第一点目は、東アジア地域における儒学思想の共通性について。

1、共通の経典と共通の概念を持つことについて。

孔子の思想典籍を整理する最初の努力から新儒学と呼ばれる「宋明理学」が成立した時代まで、儒学自身は大きな変貌をしてきた。そして、中国と周辺諸国とのさまざまな交流によって、儒学は中国以外の地域まで伝わっていった。当然のことだが、歴史の流れの中で、中国のみならず、他の地域の優れた思想家たちも儒学思想の原典に基づいて、絶えずにその注解を補い、再解釈ないし再構築の仕事をしてきた。また、個々の思想家においては当時の社会と政局の状況に対し、どの経典を重要視するかについて意見の食い違うことはしばしばみられた。例えば、あとで少し詳しく論じるが十九世紀の半ばで活躍していた曽国藩（中国）、横井小楠（日本）の場合は、曽国藩が『礼記』を最も重視していたに対して、横井小楠は『書経』を重要視にしていたのである。しかし、どの国、どの時代の思想家にしても、その思想的姿勢、その重視する経典には違いがあったが、儒学の経典の範囲及びその基本概念については終始一貫、変わりはなかった。本発表で取り上げる「誠」概念はその代表例の一つと言える。二千年も前の『中庸』と『孟子』に遡れるこの「誠」は、宋の時代以降、中国思想界においてそれを触れない人間はいなかったと言って良い。日本倫理思想史においては、武内義雄と相良亨の研究によれば、江戸時代に入ると、「誠」を特色とする日本的儒教を形成した。（注一）曽国藩は「誠」を最も強調し詳細に論述した思想家であったに対して、日本の幕末で横井小楠は「誠」をとらえた唯一の思想家でないが、「誠」の解釈について最も特色のある思想家と言えよう。

2、共通或いは類似する学習方法と実践原則を持つことについて。

周知のように、儒家知識人は「修身」「養性」「斉家」という内的努力によって、「治国平天下」を実践していくという原則は東アジア地域に、少なくとも十九世紀末まで儒家知識人の間で普遍価値として認められていた。

3、共通の倫理至上原則を持つことについて。

本来、儒学は倫理を最重要視した学問であり、倫理の実現、個人の人格の完成と政治目標の設定、政治活動の推進とは表裏の関係を持つのである。したがって倫理の原則は哲学一般の原則と同じような権威性を有している。例えば、「誠」の概念に関して、曽国藩は「誠は天の道」と力説し、横井小楠は「至誠は自然の理」を強調した。

以上のきわめて大ざっぱな概括だが、私の考えとして、比較研究を行う場合、まずそのような思想の共通性を再確認し、その上で、相違点について検討するという手順に注意する必要があるのではないかと思われる。勿論、筆者は地域による思想の大きな相違点が存在することを過小視している訳ではない。

第二点目は、現存する比較研究の問題点について。

儒学倫理思想については、すでに数多く立派な研究成果を上げているが、日中比較研究の成果は割に少ないのが現状である。その数少ない成果の中でも、若干抽象の基本概念だけを取りあげ、比較研究を行い、或いは朱熹、王陽明などの思想を取りあげ、江戸時代の思想家との比較研究を行うのが殆どである。最近中国の思想界において、明治維新前後の中日思想家の比較研究が盛んに行われているが、（注二）しかし、概念研究についてはあまり重視されていないように感じる。基本概念の比較研究は重要であるが、同時代の個々な思想家の具体的思想をむすびつける方はその研究はより一層実りあるものと思われる。逆に、個々な思想家の具体的思想例えば倫理思想を比較するなどの場合、基本概念の比較が行わないと、その研究は同様に望ましい成果を挙げるのが難しい。

第三点目は、思想転形期の倫理学を研究する意義について。

歴史的激動期において儒学の倫理的特徴が一段と鮮明に現れる。十九世紀半ばのいわゆる「西洋の衝撃」は、東アジアの儒者にとって、かつてない政治的危機であると共に文化的危機でもあった。思想家であり政治家でもある儒者は、其の心境は極めて複雑であり深刻であった。軍事的思想的面で西洋に対抗するために、儒者の責任感は強く要求される。さらに、西洋の先進技術と知識を取り入れるために、儒者自体も意識の変革を要求される。そのような局面において、儒学とりわけ儒学の倫理的思考は、変革の内的原動力を提供すると同時に、変革の対象にもなる。儒者にとって、一種のジレンマの状態に置かれたとも言える。これはかつてない衝撃的体験である。本発表が取り

あげる曽国藩と横井小楠の二人はまさにその好例であると思われる。

以下、上の問題意識に基づいて、本論に入りたいと思う。

一、曽国藩と横井小楠の生涯について。

曽国藩（一八一一～一八七二）横井小楠（一八〇九～一八六九）の年齢はほぼ一致している。そして主な政治及び思想の活動期も一九世紀四十－六十年代に集中している。この時代は中国にとっても日本にとっても文字通り「内憂外患」の時代であった。また、後の時代と違って日本と中国とは同じく植民地に陥る危険性が明らかに存在していた。清朝重臣としての曽国藩は「太平天国」と戦いながら、後に「洋務運動」と称し、西洋器械の輸入、洋書の翻訳、中国初の留学生派遣等の事業を大いに展開した。ところが、「最後の理学大師」と呼ばれるように、曽国藩は生涯にわたって儒学の復興とりわけ儒学倫理の再興をつとめた。彼の倫理思想の核心は彼自身の言葉で言えば「誠」の一字に現れている。一方、横井小楠は曽国藩のような輝かしい人生には及ばないが、肥後藩（熊本県）の一下級藩士から出発した後に越前藩（福井県）藩主松平慶永の最高顧問になり、五年間もつとめた。さらに一八六二年夏松平の幕府政事総裁の就任と共に江戸に入り、「公武合体」に尽力し、「天下の小楠」と呼ばれるようになった。横井小楠は当時の他の儒学思想家より積極的に近代西洋の社会思想及び制度を評価し、導入する道を切り開いた。それと同時に、「三代の学問」と名付ける新たな儒学の樹立に力を注ぎ、「誠」という倫理的姿勢をその学問の成立の先決条件と力説した。

二、曽国藩における「誠」の思考について。

曽国藩の「誠」概念は三十代頃に形成された。その内容構成は以下のように整理できる。

1.「誠なければ物無し（不誠無物）。」―天地の根本としての「誠」

曽国藩は『中庸』以来の「誠」概念が哲学的な性格と倫理学的性格との二つの側面を持つという論理を継承し、「夫れ天即ち誠是れなり（夫天即是誠）」、「誠なければ物無し（不誠無物）」（『賀中丞宛書簡』一八四二）、「道は誠存するところに在る（道在存誠）」を力説し、天（道）誠一致論を再確認し強調した。

2.「誠は、力行のことなり（誠者、力行之事）。」―実践論としての「誠」

曽国藩が「誠」理解の中で究極価値としては哲学的性格を考えていたが、彼がより関心を持ったのは実践倫理としての「誠」であると言える。彼は、「所謂誠は即ち其の知るところ之れを行う。是れ欺ざるなり。一句を知れば便ち一句を行う。此の二者合わせて進む。下学此に在り、上達や此に在る。」（『弟宛書簡』一八四二）と述べている。

3.「存己の誠」と「接物の誠」―人間関係の基準としての「誠」

曽国藩は「誠の字を以て本と為し、勤の字慎の字を以て用と

為す。（以誠字為本、以勧字慎字為用）」と述べ、これを「在己の誠（在己之誠）」（『李容宛書簡』一八五八）と規定した。また、「凡そ人は偽を以て来たれば、我誠を以て往くべし。（凡人以偽来、我以誠往）。」（『弟宛書簡』一八五七）と言い、これを「接物の誠」つまり他人と接するときのあるべき態度を指摘した。

4．「誠心を以て求める（以誠心求之）。」―政治行動の精神原点としての「誠」

政界の場では曽国藩の目に映ったのは中央から地方まで腐敗と無責任に満ちている現実であった。彼は当時の政界を「不黒不白不痛不癢之世界」と痛烈に批判し、「君子の道は、忠誠を以て天下の為に唱することより大なる莫かれ。」（『湘郷忠烈祠碑文』一八六〇）と繰り返して呼びかけた。

晩年になって、曽国藩の政治活動の場は国内から外交交渉へと拡大していった。彼の「人と万物の情一なり。中国と外国の情一なり。自立を以て本と為し、推誠を以て用と為す。」（『皇帝への上奏文』一八六七）という外交原則についての考えを見てみると、早期彼の「逆夷の性」の言い方が「（西洋）の人の情」に変わり、西洋倫理に一定の理解を示しているが、「誠」の理解は変わることなく「誠」の適用の面が拡大したにすぎない。また、曽国藩は「吾れ五子（周濂渓、二程子、張載と朱子の五人）の言を観る。其の大なるものは多いに洙泗（孔子孟子のこと）合する。」（『聖哲画像記』一八六〇）と述べていることから推測できるように、「誠」は依然として宋儒の理解に沿ったものと言うまでもない。

三、横井小楠における「誠」の思考について。

横井小楠の思想的展開の道のりを考察してみると、彼は早い時期から心術論重視の傾向を示していたことがわかる。その傾向を表す言葉は他でもなく「誠」であった。彼は一八五三年に書いた文章の中で「誠意の工夫」が「第一意」でなければならないと指摘した。（『伴圭左衛門宛書簡』）政治倫理として特に人君と臣僚の関係について、小楠は「人君は（中略）至誠を以て臣僚を率い黎庶を治む。執政大夫は、憂国愛君の誠を立て、（中略）敢えて己我の念を挟まず、忠誠無二、公に奉じて下を治む。」（『国富三論』一八六〇）と強調した。このようにこの時期の横井小楠の「誠」の意味あいは、「誠意は論語にて申せば主忠信之処、近思録にては為学之処、皆此学問の大本領之工夫なり。」（同上）であり、横井小楠は基本的に儒教経典の「誠」に関する解釈に準じて心術論を展開してきたのである。

晩年の横井小楠は思想の成熟期を迎え、「堯舜孔孟三代の学」と名付けられた学問の体系もほぼ完成した。「三代の学」とは「宋の大儒」の空理空論を排し、儒学の原点である「堯舜孔孟三代」の学問の精神に立脚しながら、「公論」、「公議」など西洋近代議会制度に近い考えをも盛り込んだ学問である。いわば一種の新儒学である。以下それと「誠」との関連を見てみたい。

1．「思」と「思の誠」について

横井小楠は、

「学問の眼目にて、古の学は皆思の一字に在り」、「一身の修養より天下の経綸の事業至まで、皆思より出候。」（『沼山閑話』一八六四）

と指摘しているように、先儒の学問の最終結論でなくその独自な学問追求の姿勢つまり「思」は「堯舜三代の心」即ち「三代の学」の真骨頂である。さらに、横井小楠の考えは、「思」の重要性を強調すればするほど「思」の正確さを如何にして保つかということが先決の問題となる、と進んでいき、横井小楠は

「格物の業皆己が誠の思より出候て」、「思うの誠なければ、後世の如く千巻の書を読候ても皆帳面しらべになるものに候。」（『沼山対話』一八六五）と述べた。

2．「信」と「誠」の区別について。

横井小楠が「誠」を「思」の必要不可欠な前提として考えている以上、これまで「信」或いは「忠信」と同義的に扱われてきた「誠」概念は、この点において論理的にもはや言えなくなる。横井小楠自身はこの点を意識して、次のように論じた。

「誠と信意味別なり。誠は本然の真実源頭より涌く出す。工夫を用ひず。信は發於己自尽之謂。誠に至るの道なり。」（『沼山対話』）

横井小楠の「誠」の内面から湧き出たという点は従来の解釈と変わらないが、「誠」の中から実践的性格の一面を取り除き、それを「信」という概念の中に入れた。つまり「誠」と「信」の両者の間には一種の上位と下位の関係を成立させた。従来一体化していた「誠」と「信」を、「誠」と「信」の二つの価値に分解したことによって、横井小楠の新儒学の倫理的前提が完成した。

3．「誠」は「自然の理」である。

横井小楠において、中年期の「誠」とは「中庸に申候自明自然之理」である考えから「三代の学」を樹立した晩年期の論述を見てみると、小楠が「誠」は「自然の理」という従来の考え方をずっと変わっていない。

4．「至誠惻怛の心」に基づく西洋観について

横井小楠は西洋のアジア侵攻を「暴虐無理」と批判し、日本と中国は「唇亡歯寒」（『国富三論』）という一体的関係と指摘し、当時の佐久間象山、吉田松陰らとは相当異なったアジア観を持っていた。小楠は西洋の行動が「至誠惻怛より発出」でなく「皆利害上より出たるもの」とやはり心術論の見地による鋭い批判を行った。しかし、横井小楠は同時に西洋の技術から一部の制度まで学ぶ必要があると明確に述べていた。その時、「至誠惻怛の心を以て交るべき」だ（『沼山対話』）と小楠は再三指摘した。

―結論を代えて―

一、以上の初歩的分析から分かるように、曽国藩においては、「誠」の概念は三十代前後に一旦樹立された後、生涯にわたってかわりはしなかった。一方横井小楠は若い時期に曽国藩とほ

ぼ同じ理解の下で「誠」の概念を樹立したが、晩年になると、西洋交渉面の「至誠惻怛の心」の考え方を除いて、「誠」概念を「三代の学」の創設と結び付け、新たな意味付けをしたのである。

二、東洋倫理観の独自の価値としての「誠」について

曽国藩と小楠は「誠」の哲学的根拠を論証する際、共に「天の道」或いは「自然の理」という先儒の考えに沿って単純にまとめようとしたことから見て、伝統儒教の限界が見えると言えないこともないが、しかし、曽国藩も小楠も「蛮夷」を排撃する姿勢を変えて「誠」の理念をもって西洋と積極に接するべきだと力説しており、「誠」のこのような理解は近代外交理念の樹立と直ちにつながるとは言い難いが、「華夷意識」の終焉を告げる先駆的意味があったことは確かであった。

三、「誠」概念の相違と二人の危機認識の関連について

曽国藩と小楠の「誠」概念のとらえ方の相違によって、当時の儒者が直面していた「西洋の衝撃」とは何の危機であったかに対する二人の思想家の異なった考えを読み取ることができる。小楠は政治的危機と同時に思想的危機でもあると考え、したがって、程朱理学をやめ、「三代の学」を呼ばれる儒学の再建とするのが小楠晩年に到達した結論である。新たな儒学を創り出すために、「誠」という心理的原動力が欠かせないと小楠は力説した。逆に言うと、本来実践的性格を有している「誠」を新儒学の倫理前提に変えた。ところが曽国藩は政治的危機であると同時に倫理的危機と考える。程朱理学と孔孟の道を一体であると強調することによって程朱理学の存続可能性を訴えた。「誠」の概念についても程朱理学の理解に基づいて、儒学の自身の問題でなく儒者の怠惰を是正するために、「誠」の存在的性格の意義を認めながら、より多くの場合は儒者のあるべき心の持ち方と位置づけた。

以上、「誠」という倫理概念のとらえ方を通じ、歴史的激動期における日中両国の代表的思想家である曽国藩と横井小楠における認識の共通性と相違性を見てきた。それは当時の両国の思想界の共通性と相違性ともいえよう。ちなみに、後年、曽国藩の門弟の一人である郭嵩燾は小楠とほぼ同じように宋儒の学問をやめ、「三代の学」の再建を提唱するようになった。ただ、これは小楠没後二十年近くの事であった。(注三)

―注―

(注一) 故武内義雄の「誠」のとらえ方について、学界に異論がある。子安宣邦の『誠と近世の知的位相』を参照。『現代思想　特集・日本人の心の歴史』所収　青土社　一九八二年。

(注二) 例えば魏源と佐久間象山、梁啓超と福沢諭吉、厳復と福沢諭吉などである。

(注三) 郭嵩燾(一八一八～一八九一)については鐘叔和　著『走向世界』第十三章を参照　北京中華書局　一九八五年。

(ちんえいへい　筑波大学大学院哲学・思想研究科在学中)